
アリスとテレス

水月五月雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスとテレス

【Nコード】

N2568H

【作者名】

水月五月雨

【あらすじ】

とある小さな喫茶店…。そこには一組の若い男女が店を開いていた。一人は、冷静沈着でどこか暖かみを持つ男の子。一人は、明るく前向きな、しかしどこか寂しさを持つ少女。そして今日もまた一人、誰かその喫茶店に足を向ける…。【この小説は超がつくほどの不定期更新です。作者が気が向いたとき、もしくはネタが尽き次第、その他の理由があり次第終了します。ご了承ください。】

一つめ。人は生まれながらにして知ることを欲する生き物である（前書き）

かの有名な偉人、アリストテレスが言った言葉、

「人は生まれながらにして知ることを欲する」

…今回はそんなことを考えながら読んでみてください。

一つめ。人は生まれながらにして知ることを欲する生き物である

とある川沿いのところに、小さな喫茶店がある。

ログハウスのように作られたそれは、とても温かみがありそうだ。

カランカラン

「いらっしやいませ」

そういつて出迎えてくれたのはバーテンダー服を着た、落ち着いた雰囲気を持った、精悍な顔つきをした青年だ。大人びた雰囲気を持つていながらも、子供らしさもある。髪はぼさぼさで、肩からちよつと上まで伸びている。見たところ、年は十八、九歳くらいだろうか。

「ご注文は何でしょうか」

青年が聞いてきたので、客は答えた。

「魚料理が食べたいんだが…何かないか？」

「魚料理ですか…いま、魚を釣ってきていますので…」

「テレスくん！ 見てみて！ ほら、こんなにでっかい魚！ いっぱい釣れたんだよ〜！」

青年 テレスというらしいが が話そうとしたとき、長く、地味な色をしたフレアスカートを着た、栗色のやわらかい髪をした、太陽のように明るく、かわいい女の子が店の中に入ってきた。

その頬は柔らかそうで、

その顔は実に幸せそうに、

そして人生を確実に楽しんでいる、と、言ったような顔だった。

そして、彼女は釣竿とバケツを持って。

どうやら彼女は釣りをしていたということが見てわかる。スカートの端がところどころ濡れているような染みがあるからだ。

「あ…お客…さん？」

「見てわかるだろう？ アリス」

私に気づいたのか、少女 アリスというらしい が私に向き直って、

「いらっしゅあいませっ！」

思いつきりかみながら私に接客(?)をしてくれた。

「ふふっ…」

私は思わず笑ってしまった。あまりにも、その少女が愛らしくて。

「ところでアリス。魚を釣ってきてくれたのかい？」

「あ、うん。ほら！ こんなにおっきな魚！」

確かに大きい。どうやって釣ってきたのか分からないくらいの大きさだ。これならそこら近くの町に売っても高値で捌けるだろう。

「これは僕らで食べるとして、僕はいつものこの魚を調理することにするよ」

どんな風に食べるのかこれはこれで気になった。

そしてアリスが次々に釣った魚を出していくうちに私は見覚えのある魚を見つけた。

「あ、それは…アユですか？」

私は思わず聞いてしまった。

「ええ。このあたりでよく釣れるんですよ」

「でも、その魚がつかれるところは教えないけどねっ！」

そういつてアリスは私に向かって舌を出して小さく笑った。

「ま、そういうことです。企業秘密、ということでは？」

「あ、では…その魚を調理してもらえませんか？」

私がぶしつけがましく言ったあと、テレスと言う方はほくそ笑みながら、

「かしこまりました」

そっぴいなながら慣れた手つきでアユを捌いていた。

テレスはまずアユの内臓を取り出し、塩をまぶし、フライパンを熱している間に油を引いて…私のためにアユを調理していた。

「で？ あなたはどこから来たんですか？」

調理をしている間、私は自分の身の上でもアリスに話すことにした。そして私は話した。自分の生まれ、過去、そして目的。そしてその旅の目的…それは、

世界の起源を、探すこと。

はじめ、世界には何もなかった。それでも、世界には何かがあったことがわかる。

だからこそ、私は知りたい。

世界の起源を。

この目で。自分自身で見てみたい。そう思って旅をしていることを話した。

そして無垢なる少女は答えた。

「世界の起源は、皆が知っているものですよ？」

「皆が知っているもの？」

「そうですね。世界の起源なんて皆知らない。忘れちゃってるんだと思います。」

だから人は知りたい。

見たい。

確かめたい。

聞きたい。そんな欲求があるからこそ、人は何かを知りたがるんだと思います。

知っていますか？ どこかの誰かが言っていたんですが…。

『人は生まれたときから知ること欲する生き物である』って言うてました。

そしてあなたは、世界の起源を知りたい。それだからこそ、旅をしているんでしょう？」

そういつてアリスはカウンターのの中から水を出した。

…きれいな水だった。そしてそれゆえにおいしかったのかもしいい。

そして私はテレスが作ったアユのムニエルを食べさせてもらった。
暖かく、そしてやわらかく、ほんのり甘くて苦かった。

しかし、それだからなのか。おいしかった。

お代のを払おうと思ったたらテレスが手で制し、

「アリスと話をしてくれたこと。それがお代です」

そういつて私を送ってくれた。

あれから何日経ったであろうか。

あの味は今でも忘れてはいない。

だからこそなのだろうか、私は今でも旅をしている。

世界の起源を、今でも何であるかを探すために。

二つめ。欲望を抑えつけるのが人間。本能のままに生きるモノが獣。

川沿いにあるとある小さな喫茶店…。

ログハウスのように建てられたそこには今日もまた旅人がやってきていた。

「君！ この皿は君が焼いたのかい！？」

「ええ…そうですが、なにか？」

恰幅の良いその旅人は興奮した目でそのカウンターの前に立っていた青年…年の頃は十八、九歳と言ったところである。髪の毛はぼさぼさで、肩の上までちよつと伸びている長さである。

「そうだ！ これほどの皿を焼ける技術があれば、君はとてもいい陶芸家…いや、アーティストになれる！」

旅人は上気した目でその青年を見た。するとその時、

「テレス君どうしたの？」

寝ぼけ眼でカウンターの奥から栗色の髪をぼさぼさにしながら地味な色のフレアスカートを着た女の子が出てきた。気怠さの中にも無垢のかわいさ…そんなモノが潜んでいそうなかawaiiさだった。

「お嬢さん！ あんたからも言っただけでお願い！ 私と一緒に大きな町に行こうって！」

「…うえ？ テレス君…どっかいつちやうの…？」

寝ぼけた声で首をかしげながらその女の子は言った。

「行かないよ。僕はどこにも」

そういつてその青年…テレスは少女に向かって柔らかかな、しかし強い決意を込めた笑みを返した。

「お願いだ！ 一緒に来てくれ！ なんならその女の子も一緒に来てもいい！」

その旅人は必死にテレスに頼んだ。

「…私もどこかに行くの？」

「行かないよ」

怯えた表情で少女が言ったとき、即座にテレスは言った。

「僕はどこにも行かない。アリスをもう、どこかにおいていくなんて事はもうしないから……」

そういつてテレスは少女…アリスの手を握った。アリスはテレスの手のぬくもりを感じて少しほっとしたような顔を浮かべていた。

「だ…だめだ！ 君は私と一緒に町に来るべきだ！ こんなところで才能を埋もれさせるわけにはいかん！」

その旅人はアリスの手を強引につかみ、そのまま自分の所にたくり寄せた。

そして首筋に腰の辺りから抜き取ったナイフをアリスの首筋に当てた。

鈍色の光が獯猛そうに、血を欲しているかのようにアリスの首筋を映している。

「さ…さあ！ 私と一緒に来るんだ！ そ、そそそそそうじゃないと、こ、この女の子の命はほ、保証できないぞ！」

そう言っていたが、その旅人は恐らく初めてナイフを扱ったのだらう。歯がかちかちと音を立て、額にはうっすらと汗が浮かんでいた。ナイフを握っている手は小刻みに震えていた。

そしてアリスは怯え始めた。

「いや…いやあああああっ！」

そしてその旅人の腕の中でもがき始めた。

「暴れるな！ あの少年が…君の彼氏が私と一緒に来てくれれば、全ては丸く収まるんだ！」

「一つ忠告させてもらいましょう。僕はアリスの恋人、ではなく保護者だと言うことです」

そう言った後、テレスは半ばやれやれとしながら「分かりました」といった後、

「ここにおいてあるのは全部僕が焼いた皿です。そんなに欲しければ好きなだけどうぞ。持って行ってください」

テレスがそう言った後、その旅人は目が変わった。

「…いいんだな？」

「ええ」

「…ホントに良いんだな？」

「ええ。好きなだけ。どうぞ持って行ってください」

そう言った後、その旅人はアリスを床に放り出し、そのまま目の前にある食器棚へと一直線に向かつていった。

そして食器棚を開けると同時に、手当たり次第皿を持っていた鞆に詰め込み始めた。「私の皿だ」「私のモノだ」「誰にもやらん」「誰のモノでもない」「私の皿だ」「私の」「私の」「私の」…そんな譫言をいいつつ、鞆がはち切れそうになるほど詰め込んだあと、その旅人は喫茶店から出て行った。

旅人があわただしく出て行った後のドアにくくりつけてある鐘が、静寂を告げるかのように鳴った。

「アリス」

テレスは目の前で縮こまっているアリスを見た。

アリスは膝を抱え込み、下を向き、手を強く握っていた。肩は震え、怯えていた。

「もう、いないよ。怖くないよ」

そしてテレスは一拍おいて静かに言った。

「僕がいつまでも、アリスのそばにいるからね」

二つめ。欲望を抑えつけるのが人間。本能のままに生きるモノが獣。(後書き)

あの旅人はどこに行ったのかは誰も知らない。

ある人によれば、近くの町で大成功を収めたとか、

ある人によれば、どこかの谷で落ちてしまつて死んでいたとか、

本当のことは誰も知らない。

そして、僕が知ることじゃない。

三つめ。人は働くことこそが一番の幸せなのかもしれない。

仕事の話・Tの場合

「仕事をください」

不意にそんな声が室内に響いた。

そしてそれに返すような少年の声とおぼしきもの。

「ダメだよ。うちには人を雇うほどのお金ありませんし、設備もありません。泊まるどころも」

「しかしボクには仕事が必要なんです」

室内に声を響かせた主は言う。

「だからだよ。こんな辺境のところでもうして仕事を探そうとするんだい？ 君にはもつと…何か重要な事が必要じゃないのかい？」

少年の声とおぼしきものは、どうやら部屋の奥で聞こえるようだ。そして声を響かせた主は答える。

「ボクはいろんな事に手を染めてきました。染め物や料理、機械もいじりました。しかし、自分にあつた仕事がありませんでした。だからボクはまた仕事を探しています。ですからお願いです。ボクに仕事をください」

「ダメだよ。うちには人を雇う程のお金ありませんし、設備もありません。泊まるどころも」

そして、室内に声を響かせた主は諦めたと言わんばかりにそこを後にした。

室内はまた、静寂に包まれた。

ただ一つ、食器を洗っていると思う水が流れる音以外は。

仕事の話・Aの場合

「おい、小娘！ 俺に仕事をよこせ！」

「なんで〜？」

「決まってるだろ！ 金がいるからだ！」

大柄の男は、目の前で退屈そうに座っている女の子に話しかけていた。いや、それを話しかけている、と言ったら恐らく違うだろう。むしろ端から見たら脅しているのとれるかも知れない。

「なんでお金がいるんですかあ？」

「決まってるだろ！？ 逃げるためだよ！！ 俺は以前自分の国で人を殺した。そして国のやつらはいつまでたっても追って来やがる。それから逃げるためには金が必要なんだよ！ とにかく俺を働かせろ！」

「だったらお金を奪って逃げればいいじゃないですか」

「それはやらねえんだよ！ 俺にも守るべきプライドがあるからな」
女の子は黙っていた。あきれている、というような顔でもあるし、なんと言ったらわからない、という顔でもあった。

「とにかく！ 仕事だ！ 俺に仕事をよこせ！」

「…わかりました。仕事をあげます」

「おお！ 俺に仕事をくれるのか！？ ありがてえ！ んで、どんな仕事なんだ？」

女の子はにこやかに言いました。

「ここから出て行くことがあなたの仕事です」

「ねえ… テレス君」

「なんだい？ アリス」

二人は外でのんびりと紅茶を飲んでいた。風を受け、波打つ草原を眺めながら。

「この前やってきた二人は、おんなじ国からやってきたのかなあ…」

「どうしてそう思うんだい？」

「だって…この間やってきていた二人と、おなじような感じのことを言ってたんだもん…」
そう。

二人はこの前、やってきた二人の旅人をのことを話していた。彼は変わった風体だった。長いロングコートに、黒いズボン。荷物は手に持っているかばん一つ…という、おおよそ旅人とは思えないような服装だった。

「…さあ。わからない。ただその旅人は話していたよね。最近どこかの国が財政困難に陥って、崩壊したって。ひよつとしたらやってきた旅人はその国の出身だったのかもしれない」

「だったら…雇ったほうがよかったのかな…？」

アリスがどこか、物悲しそうな表情をしながら遠くを見た。自分たちが追い返した旅人たちのことを思っているのかもしれない。

テレスは言った。

「アリスは僕以外にここで暮らす人が増えてもいいのかい？」

アリスはそれを聞いたとたん、俯いて、

「…いや…」

とつぶやいた。

「僕もだ。ここにいるのは僕ら二人だけで十分だ」

そして、柔らかな風が一陣、二人の頬をそつと撫でた。

そしてテレスは紅茶に口をつけ、ソーサーに置いて一言つぶやいた。

「人は、働くことが一番の幸福なのかもしれない…」

四つめ。人が人である理由。人が生きたいと思う理由。人が死にたくないと思

彼らは同じ国の生まれではありません。

彼らは、奴隷として、様々な国の市場で売られていました。

狭く、暗く、くさい馬車の中で二人は震えながら過ごしていました。ある国に行っても、二人は売れず、

また別の国に行っても二人は売れなかったのです。

その理由は、二つ、ありました。

一人の女の子は、顔立ちもキレイで、将来は美人になりそうな女の子でした。

しかし彼女は、自分の父親から、ひどい暴力を受けていました。

冷水を頭からかけられ、外に閉め出す。ご飯を食べさせないし、げんこつで理由もなく殴られる、蹴られるなんて日常茶飯事。

ガラス窓に頭をつっこまれる、椅子で殴られる、瓶で叩く。火箸をつっこまれる。などなど。そんなことがありました。

だから、女の子は男の人が怖く、触れるのすらいやがっていました。そして、もう一人の男の子は誰にでも好かれそうで、これもキレイな顔立ちでした。

しかし、彼は誰も信じませんでした。

なにも、信じませんでした。

この世の全てが、嫌いでした。

生きてる物全てが、嫌いでした。

自分自身も、嫌いでした。

そして、買われることも、嫌いでした。

全部嫌い。何もかも嫌い。

だから、他の人の所に行くのも、嫌いでした。

満月がキレイな夜でした。

二人を乗せた馬車が急に止まりました。

何かかと思つて、女の子の方がそばにあつた鉄格子をのぞいて見ました。

すると外では、奴隷商人の男の人が、野犬に襲われていました。

悲鳴、悲鳴、悲鳴。

うなり声、肉をちぎる音、ぷちぷち、血が地面を、壁を、走る音。

そして、こちらの馬車にも、野犬がやつてきました。

呻る野犬。口にはしたたる血、月光に光る目。

そして、野犬の一匹が女の子に飛びかかりました。

女の子はそれを呆然と見ていました。

ああ、これで自分は死ぬんだ。女の子は思いました。でも、いいか。女の子は思い返しました。

だつて、今の今まで生きていても、何も、いいことは無かつたんだもの。女の子は思い出していました。

生きていても、苦しいことばかり。だからもうこの場で死んでもいいんじゃないんだろうか。女の子は思いました。

死ぬのつて、痛いんだろうか。女の子は思いました。

男の子は呆然と、女の子が野犬に襲われる様を見ていました。

ああ、女の子に野犬が襲いかかろうとしている。男の子は思いました。

しかし、自分には関係ない。男の子は思いました。

だつて、自分には関係ないんだから。男の子は思いました。

ああ。あの子が死んだら次は僕なのかな。男の子は思い返しました。親には見捨てられた。生まれてきてからずっとひとりだった。全部

を憎んだ。嫌になった。だから僕は僕以外は信じない。男の子は思いました。

死ぬのは、怖くないんだろうか。男の子は思いました。

死ぬのは、怖い。女の子は思いました。

怖い。

怖い。

怖い。

怖い。

死ぬのは、嫌だ。男の子は思いました。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

死にたくないなら、その自己主張をしなくては。女の子は思いました。

女の子はゆっくりと、身をかがめて、頭を自分の小さな、汚れた手で隠し、膝を抱えた。

死ぬのが嫌ならば、やられる前にやらなくては。男の子は思いました。

男の子はゆっくりと、静かに、奴隷商人の所に行き、その亡骸の腰から銃をとりました。

何回も。何回も。脅し、痛めつけられた奴隷商人から、その力の象徴だった、銃を。

野犬は、ゆっくりと、ゆっくりと、女の子に近づきました。

牙をむき出しにして、泡と血に混じった涎を垂らして、近づきました。

そして、噛みつきうとしたとき。

ぱあん。

乾いた音がしました。

野犬が一匹、頭から血が一筋流れ出しました。

そのあとからもどくどくと血が出てきました。

野犬は一斉に撃たれた方角を見ました。

男の子が、銃を両手でもって、足をがたがた震わせていました。

「ごめんよ」

男の子は静かに言いました。

男の子は静かに言葉を紡ぎます。

「僕らは、生きたいんだ。死にたくないんだ」

「僕らは」

「人間なんだ」

「生きたいんだ」

「死にたくないんだ」

そして、短く息を吐いた。

「さあ。行ってくれ」

野犬は、少しずつどこかに行っていった。

少しずつ。少しずつ。

あとに残ったのは、壊れた馬車と、一人の元人間と、一人の男の子と、一人の女の子でした。

女の子は言いました。

「何で助けてくれたの？」

男の子は言いました。

「自分の身を守るためさ」

女の子は言いました。

「嘘でしょ？」

男の子は言いました。

「嘘だよ」

女の子は言いました。

「だったら、何で助けたの？」

男の子は言いました。

「きみを守りたいと思ったから」

女の子は言いました。

「嘘でしょ？」

男の子は言いました。

「嘘じゃない」

女の子は言いました。

「じゃあどうして守りたいと思ったの？」

男の子は言いました。

「きみと一緒に生きたいと思ったから」

女の子は言いました。

「じゃあなんで生きたいと思ったの？」

男の子はゆっくりと、時間をかけて告白しました。

「自分自身が、きみを助けて、きみと一緒に生きて、暮らして、そして死にたいと思った」

男の子は言いました。

「きみの名前はなあに？」

女の子は言いました。

「あなたの名前はなあに？」

男の子は言いました。

「ぼくの名前はテレス」

女の子は言いました。

「わたしの名前はアリス」

テレスは言いました。

「どこに住もうか」

アリスは言いました。

「どこに行こうか」

これが、始まりの物語。

それだけの話。

それからの話は、

四つめ。人が人である理由。人が生きたいと思う理由。人が死にたくないと思

えー……… すいません。ネタ切れです。

あらずじ部分にもありましたように、このアリスとテレスはネタ切れなどの理由で終了する、と言っていました。

そして今。

ほんつとにネタ切れです。

しかし。

このまま、アリスとテレスを死なせるわけにはいかないかな、と思っ
ています。

自分の勝手な理由で、この二人がいなくなるのは、とても辛いです。
いつか。

ホントに機会があったら。

また、この二人には会うことができるのかもしれない。

読者の皆様。

この小説、「アリスとテレス」に付き合っていたいただき、ありがとう
ございました。

これを読んでくれた、読者の皆様に、感謝を込めて。

敬具

作者、水月五月雨

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2568h/>

アリスとテレス

2010年10月13日17時35分発行